平安時代私家集歌人の研究

平安時代私家集歌人の研究

安藤太郎 著

著者略歴

安藤 太郎（あんどう たろう）

大正7年 北海道に生まれる。
昭和28年 東京文理科大学国文科卒業。
昭和45年 東京成徳短期大学講師就任，その間，大正大学講師を勤める。
現 在 東京成徳短期大学教授。
現住所 〒203 東京都東久留米市小山4—5—16

平安時代私家集歌人の研究

昭和57年4月20日 初版印刷
昭和57年4月25日 初版発行

定価 12,000円

著 者 ©安藤太郎
発行者 今井肇
印刷所 岩村田活版所

発行所 株式会社 桜楓社
東京都千代田区猿楽町2—8—13
（郵便番号）101 （振替）6-18020
（電話番号）03—295—8771㈹

Printed in Japan
（著者検印は省略いたしました）
3092—820440—0723

造本には充分注意しておりますが，万一落丁，乱丁などがございましたら，おとりかえいたします。

はしがき

平安時代の歌人と家集との出会いは、私にとって偶然なものであった。

それは、大学卒業後、三、四年経った頃、東京教育大中古文学部会に入会して、やがて鈴木一雄先生の企画による「平安女流文学者総覧」（「国文学解釈と鑑賞」―昭和三十五年八月）の分担執筆のときに始まった。その折、平安女流歌人、家集の論についての諸先生の業績を参照し、安芸、相模、弁乳母などの女流歌人の紹介をしたのが、平安時代の歌人について興味を抱いて筆を執った最初のものであった。

その後、間もなく、宮内庁書陵部の桂宮本を閲覧させていただき、鈴木一雄先生にご教示を賜わり、「道信集について」（「文学・語学」―昭和三十五年十二月）を発表した。

しかしその後、研究一すじには専念できず、今やっと従来の論文を整理しささやかな本書をまとめることを思い立ったのであるが、今更ながら平素の不勉強が痛感されるのである。

本書には私家集そのものを対象としていない論考も含めた。これらはその基底においては、平安時代の私家集や歌人とつながっているからである。

平安時代の歌人、歌集（勅撰、私撰、私家集など）には、何かその歌人の不滅な生命、あこがれを感ずるのであるが、それを文学として捉えようとするとこんな形でしか表現できない私自身の浅学、菲才をかこつのである。

それにも拘らず、常に変わらないご指導、ご叱正を賜わった鈴木一雄先生に厚く感謝を捧げるとともに、ご教示

をいただいた小西甚一先生、鎌田正先生、宮内庁書陵部の貴重な文献の閲覧、ご教導を賜わった橋本不美男先生、先学の諸先生に心から御礼申し上げる次第である。

更に本書の刊行を御快諾下さった桜楓社及川毅社長、編集部今井肇氏、また今井伸行氏、小林実千代氏ほか桜楓社の皆様のご援助に厚く感謝しつつ筆を措くものである。

昭昭五十七年四月

安藤　太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

平安時代私家集歌人の研究　目次

はしがき
道信集の伝本と諸本関係について……七
道信集成立事情の一断面……二六
道信集作歌年次考……三九
藤原道信の生涯……五五
忠岑集について……四四
忠岑集の作歌年次とその基底……六六
信明集の伝本と構成……一三三
源信明伝――家集を中心として――……一三五
御所本中務集について……一五三
大鏡における中務上京説話……一七三

朝光集伝本書写の一考察……一九〇
——類従本奥書を中心として——
藤原朝光の詠歌と年次……二〇八
題画詩と屏風歌……二四二
——平安朝初期の屏風歌の一考察——
朱雀院女三宮の準拠と女二宮……二六七
——源氏物語第二部の一考察——
更級日記の一考察……二八四
——日記に描かれた資通——
所収論文について……三〇〇

平安時代私家集歌人の研究

道信集の伝本と諸本関係について

一　伝本・資料

道信集の伝本は松平文庫本、榊原本並びに宮内庁書陵部蔵桂宮本甲・乙・丙の三伝本が知られ、いずれも近世初期の写本と言われている。本稿では以上の五伝本についての考察を試みる。

はじめに、武家本といわれる肥前島原松平文庫本は今井源衛氏[注1]の解説の通り、題簽「道信集」、内題「藤原道信朝臣集」、歌数一〇五首、他に連歌四句、更に、巻末に「入撰集不見当集歌」として四首あり、この勅撰集付載歌四首を除き、松平本だけに見られる歌は、後掲の伝本対照表の通り一〇首である。勅撰集付載歌のあとに、「本云合点者三位入道本哥也」という簡単な奥書があり、最後に道信の略伝の短い勘物が記されている。

同じ武家本で、榊原本道信集は題簽「道信集」、内題も松平本と同じである。『榊原本私家集(一)』所収、道信集影印本によれば、漢字・仮名の別、仮名遣いの相違を別とすれば、後述の本文の若干の異同を除き、小町谷照彦氏[注2]の解説通り、松平本道信集と内容が一致する。

次に、松平本道信集と榊原本の比較の要点を述べよう。

A　松平本の歌数、歌順、奥書、巻末勅撰集補入歌、勘物は榊原本と全く一致している。

B　松平本の奥書は前述のように「本云合点者三位入道本哥也」と記され、松平本には三七首の詞書もしくは歌の右側に、細字の校合、書込みが見られ、それは榊原本と全て一致する。但し、後述のように榊原本にある合点が一箇所だけは松平本には見えない。

C　松平本と榊原本では漢字・仮名の別、仮名遣いの相違を除くと、次の歌、もしくは詞書が異なっている（括弧内の数字は歌番号を示す。連歌は二句を一首として数えた数字である）。

(ア)　ことしいまたあはぬ女に七月七日に（松平本20の詞書）

傍線部「に」は榊原本にない。

(イ)　人はみなすくる月日をなけくとかものおもふ身にはえしらさりけり（松平本35の歌）

榊原本は傍線部に「しられ」の合点が入っている。

(ウ)　見る人もなきやまさとのはなのいろはなか〳〵かせそおしむへらなれ（松平本55の歌）

榊原本は傍線部「なる」とある。

(エ)　かはつなきゝけはさきぬるやまふきのくちなしいろにいかて見ゆらむ（松平本68の歌）

傍線部は榊原本「なけは」とある。

(オ)　日をつまは身をいかならんとおもふかなきのふはものもおもはさりけり（松平本71の歌）

傍線部、榊原本は「身やいかならん」と、傍点のように「や」になっている。

右の相違の他に次の二箇所が異なっている。

(カ)　ゑみなからそてこそぬるれかきりな　しのひあまれるかたとおもへは（松平本43の歌）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

榊原本は松平本の傍線の部分が「いてて」とあり、それを見せ消ちにして「そて」を右に書き入れている。

(キ)　右大臣殿のむこになりて・つとめて（松平本49の詞書）

榊原本は松平本の「の」の脱落が見られない。

以上のA・Bにより、松平本と榊原本は同一系統本と考えられ、更に両者の関係は、

(1)　松平本、榊原本は、どちらかが一方を書写した。

(2)　松平本、榊原本はともに同一の伝本を書写した。

の二つの場合が想定できる。

さて、前述のCに掲げたように、松平本と榊原本の本文の相違は五箇所、見せ消ち、脱落の補入修正が二箇所ある。これらを次に検討しよう。

(ア)　の松平本の「七月七日に」の「に」は、上文に「女に」とあるので、下の「に」は衍字と思われる。

(イ)　は、榊原本の校合書入れの「しられ」の箇所は、松平本の方が脱落したものと考えられる。

(ウ)　松平本「なれ」は、上に、「かせそ」とあるので、連体形止めが文法的に正しく、榊原本のように「なる」とあるべきである。

(エ)　松平本の踊り字「〻」は「可」の草体ともみられるが、上の「なき」の「な」のつもりで「〻」と書いたものと考えられる。

(オ)　の松平本「身を」は疑問の係助詞「や」とあるほうが無理ない形と推定される。

ここに述べた松平本と榊原本の相違は、いずれも松平本の単純な書写上のミスと考えられるが、その点は榊原本の方が正確に書写していると認められる。

また、右の(力)は恐らく榊原本のもとになった本にあったのではなく、榊原本自体の書写上のミスであろうと思われる。また、(キ)の項の「の」の脱落は勿論、松平本のミスと推定される。

以上の比較から、前述の(1)のように、どちらかが一方を書写したという仮定に立てば、榊原本が松平本に拠ったことは考え難く、むしろ松平本が榊原本によったと推定されるのである。(注3)

次に、書陵部本三本は題簽ともに「道信朝臣集」、伊地知、橋本氏(注4)の解説によれば題簽はすべて霊元天皇宸筆とされている。

これらの三本の中で、甲本は歌数九四首（このうち、歌番号94は、「ひとのおほむ本にきこゆる」の詞書だけで歌は脱落しているが、松平本・榊原本・丙本により補えるので一首と見なす）、ほかに連歌四句、重出歌一首で、甲本だけに見られる歌は三首である。

乙本は歌数六六首、他に連歌二句、乙本だけの特有歌は八首である。

丙本は歌数五八首、他に巻末に、「或本この歌ともあり」として一五首が記されている。或本の歌の中で一一首を除き丙本独自の歌はない。

次に、以上の五本のうち、松平本・榊原本は前述のように本文に小異あるも、歌順、内容が同一なので、この二本を榊原本で代表し、これら四本の歌番号による対照表を掲げよう（連歌は二句を一首と数える。榊は榊原本の略称）。

道信集対照表

榊	甲	乙	丙
100			
101			
102			
103		7	
104			
105			
106		4	
107			
(1)			
(2)			
(3)			
(4)		65	
	18		
	25	48	
	31		
		5	
		6	
		46	
		57	
		64	
		66	
		67	
			(2)
			(3)
			(4)
			(5)
			(6)
			(7)
			(8)
			(9)
			(10)
			(11)
			(12)

榊	甲	乙	丙
67	72	35	51
68	73		54
69	74		(14) 53
70	75		55
71	76		56
72	77		52
73	78		58
74	79		57
75	80	37	32
76		38	33
77	81	39	34
78	82		35
79	83	40	36
80	84	42	37
81	85	41	38
82	86	44	39
83	87		40
84	88	43	41
85	89		42
86	90		43
87	91		44
88	92	59	45
89	93	60	46
90	(94)		47
91	95		
92	96		
93	66	61	(15)
94	67	56	
95			
96			
97			
98		63	
99			

榊	甲	乙	丙
34	36	23	14
35	37		15
36	38	24	16
37	39	25	17
38	40	26	(13) 18
39	41	27	19
40	42	28	20
41	43		21
42	53	29	22
43	46		
44	47	62	
45	48		
46	49		
47	50		
48	51	54	
49	52	55	
50	44	58	
51	54		23
52	55		
53	56	30	24
54	57	31	25
55	58	32	26
56	59	33	27
57	60	34	28
58	61		29
59	62	36	30
60	63		
61	64		
62	65		
63	68	16	31
64	69	17	48
65	70	18	49
66	71	19	50

榊	甲	乙	丙
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3		3
4	4	3	4
5	5	8	5
6	6		
7	7		
8	8		
9	9		
10	10		
11	11		
12	12		
13	13	45	
14	14	47	
15		9	6
16	15	10	7
17	16	11	8
18	17	12	9
19	19	13	10
20	20	14	11
21	21	15	(1)
22	22	20	
23	23	22	12
24	24	21	13
25	26	49	
26	27	50	
27	28	51	
28	29	52	
29	30	53	
30	32		
31	33		
32	34		
33	35		

対照表注

㈠ 榊原本47・91はそれぞれ連歌二句、(1)〜(4)は「入撰集不見当集歌」である。

㈡ 甲本(94)は前述のように詞書だけあって歌の脱落したもの。25・95はそれぞれ連歌二句。44と45は重出歌。

㈢ 乙本48は連歌二句。

㈣ 丙本(1)〜(15)は、「或本この歌ともあり」の歌、この中で、(13)(14)は丙本17・54とそれぞれ一致する。

道信集の以上の四伝本を通じ、重出歌を除き、榊本の「入撰集不見当集歌」並びに、丙本「或本この歌ともあり」の歌を含め総歌数一三二首を数える。

なお、榊原本道信集の巻末記載の「入撰集」云々の歌四首中、前述対照表の(1)の「人なしゝむねのちふさを」の拾遺集（哀傷一二九四）の歌は、「としのふか流されける時流さるゝ人は重服をきて罷ると聞きて母かもとよりきぬに結びて」（国歌大観）と詞書にあり、作者名は記載がないが、詞書から道信の歌とは考えられず、この前の歌が、「朝顔の」の道信の歌で「藤原道信朝臣」とあるのにひかれて、この本を書写した人か、もしくはその伝本に記載した人が誤ったと思われる。また同じく巻末記載の補入歌(3)の「ふる事は」の続拾遺集の歌は別項[注5]のように道信の歌とは認められない。

更に、丙本巻末記載の「或本」の歌一五首中、第二首から第一二首までは連続して道信集の他の伝本にも見えず、又勅撰集その他の私家集にも見られない。第二首の詞書には「つるのはにかきてこのふみつたふる人に」とあることから推測すると、以下連続した第一二首までの一一首は、道信の歌ではなく、道信集を書写した人とその伝本を所持していた人との贈答歌、もしくは独詠歌が何かの事情で混入記載されたとも考えられる。

次に、道信集に見られる歌で勅撰集に採録されている歌は次の通りである。いま勅撰集名とその歌番号だけを掲

げよう（勅撰集は国歌大観の歌番号による。道信集は榊原本で代表し、それにない場合は甲本もしくは乙本の歌番号を示す）。

榊 1	後拾遺	雑2	969
2	玉葉	恋4	1693
3	後拾遺	恋2	672
4	後拾遺	恋2	671
12	風雅	冬	766
13	千載	雑上	960
14	後拾遺	恋2	676
16	詞花	恋上	222
17	後拾遺	恋1	644
18	拾遺	哀傷	1283
20	後拾遺	恋3	767
21	新古今	哀傷	808
23	新勅撰	恋1	646
24	新勅撰	秋上	275
25	新古今	哀傷	760
26	新古今	哀傷	761
32	新古今	雑下	1796
33	新古今	雑下	1797
36	新勅撰	恋5	960
37	新後拾遺	恋1	927
38	後拾遺	恋4	798
45	風雅	恋5	1330
46	千載	雑中	1091
47	新勅撰	雑2	1164
52	後拾遺	別	465
53	後拾遺	別	470

榊56	続拾遺	羈旅	697
57	新古今	恋5	1342
63	拾遺	哀傷	1293
67	後拾遺	春上	69
70	千載	哀傷	564
73	新古今	恋3	1170
74	新千載	慶賀	2293
75	新古今	春下	167
76	後拾遺	誹諧	1203
79	新勅撰	恋2	720
80	新拾遺	夏	227
81	千載	春上	23
84	続古今	恋4	1269
85	新古今	冬	616
89	後拾遺	恋2	673
90	新古今	恋2	1041
93	千載	哀傷	548
95	続後撰	恋3	830
98	新勅撰	秋下	285
99	新古今	秋下	486
105	風雅	雑下	1777
106	玉葉	恋1	1290
甲18	続古今	哀傷	1432
31	後拾遺	恋4	821
乙65	玉葉	恋5	1782

右の表のように、道信集に見られる勅撰集は拾遺集以下五一首（但し、榊原本巻末補入記載の勅撰集四首を除く）、後拾遺集の一三首が最も多く、新古今集の一一首がこれにつぎ、五一首中、道信の歌は四六首と推定される。

つづいて、道信集中に見られる他の私家集の歌は、

公任集二首（榊原本18・甲本18）　小大君集四首（榊原本63・75・76・95）　実方集九首（榊原本25・26・30～33・96・97・104）　和泉式部集一首（甲本31。但しこれは混入歌と思われる）

なお、公任集には道信集に見えない四首が道信の歌として記載されている（書陵部本397・405・407・408）。

私撰集、歌論書、歌書では道信の歌は次の諸書に見られる。

拾遺抄（榊原本18・63）　後葉集（同75）　雲葉集（同80）　玄々集（同16・18・63）　続詞花集（同27・55・85）　後六々撰（同3・4・17・18・63）　夫木抄（同21・48・74）　和漢朗詠集（同18）　時代不同歌合（同99）　後十五番歌合（同63）　難後拾遺（同67）　俊頼髄脳（同55）　古来風躰抄（同18・63）　近代秀歌（同63）　詠歌大概（同63）　定家十体（同63）　百人秀歌（同63）など。

右の中で、夫木抄には道信集に見えない歌が二首存在する。

さきそむる山への梅の香にめては花のたよりときみやおもはん　　藤原道信朝臣

このうたは前大納言二位卿北白川の家に春の比道信朝臣きたりけるに花こそ宿のあるしなりけれとよみ侍りける返しと云々（第三梅）

家集すきむらのもりを

はふきつゝいまや都へほとゝきす過かてになくすきむらのもり　　道信朝臣（第十九風）

但し後の「はふきつゝ」の歌は実方集（類従本、書陵部戊本）に見られ道信の記載がないので道信の歌とするのは疑問がある。

この他、道信の歌は、歴史物語、説話などに見られる。

栄花物語（榊原本16）　古本説話集（同16・63）　大鏡（同16・63）　宝物集（同63）　今昔物語（同1・18・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com